

第11

回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして
明らかになった -登戸研究所掘り起こし運動30
年のあゆみ-」記録 展示内容解説

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学平和教育登戸研究所資料館 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 百合子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/22082

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった —登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」記録 展示内容解説

塚本百合子

明治大学平和教育登戸研究所資料館特別嘱託学芸員

はじめに

2020年に開館10周年を迎え、当館開館までのあゆみを今一度調査し記録することを目的とし、本稿の基となる第11回企画展を企画した。40年近くにわたり川崎市民、高校生そして元登戸研究所勤務員とともに登戸研究所研究に携わってこられた渡辺賢二氏（当館展示専門部会委員）より登戸研究所勤務員のOB会「登研会」資料の提供を受け、元登戸研究所勤務員自身の登戸研究所掘り起こし運動についても今回、光をあてることができた。また、明治大学に保管されていた登戸研究所に関する資料についても今回初めて調査を行い、当館が開館するまでのあゆみを大学資料からも紹介することができた。

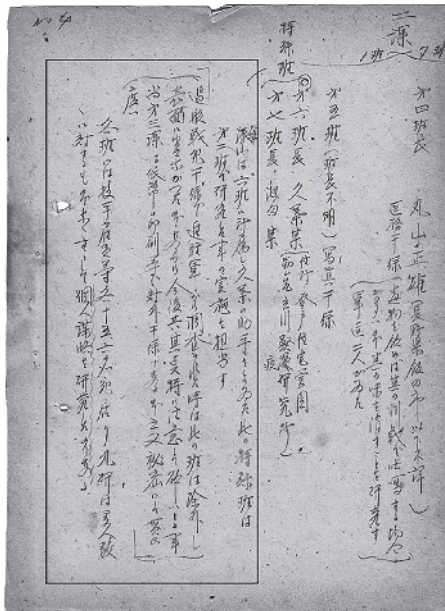
なお、ここで紹介している資料のほとんどが、登戸研究所資料館公式Webサイトの「イベントの記録」で見ることができるので、特に文書資料はこちらもあわせてご参照いただきたい。

1. 登研会の発足と「登戸研究所跡碑」建立

(1) 終戦とその後の元登戸研究所関係者

終戦となり、登戸研究所関係者もGHQの訊問を受けた。帝銀事件『捜査手記』⁽¹⁾（第1図）からは、いわゆるBC級戦犯にあたる罪に問われることを恐れ、GHQに第三科の活動（偽造紙幣謀略担当）と第二科第六班（風船爆弾に搭載する予定だった生物化学兵器研究開発担当）については証言していないと語る山田桜（第二科科长・技術大佐）の姿を認めることができる。しかし、元所員で戦争犯罪を問われたものはいなかった。なぜならば、米国と元所員の間には「ギブ・アンド・テイク」の関係が築かれ、1950年頃より元所員の一部は米国の求めに応じ、米海軍横須賀基地内で米国の秘密戦に携わるようになったからである。戦犯にはならないこと

がわかった元所員らは、徐々に登戸研究所で培ってきた自身の研究成果や作戦の功績を世間に示すようになる。第1表に登戸研究所関係者の体験記などが掲載された雑誌・書籍一覧を示す。風船爆弾関係者や偽造謀略関係者は登戸研究所関係者の中では最も早い段階である1950年代には体験談などを発表している。戦犯に問われないことがわかったからである。まず、1951(昭和26)年初頭には風船爆弾開発協力者の一人である高田貞治が風船爆弾について詳細に雑誌『自然』で発表している。また、偽造紙幣謀略機関「阪田機関」の機関長だったさかたしげもり阪田誠盛は1949年に発生した密輸事件「海烈号事件」⁽²⁾で検挙され、米陸軍第八軍司令部による軍事裁判で禁固5年・罰金5,000ドルの判決が1950年6月に出るも⁽³⁾、1951年12月には在日兵站司令部の「クリスマス恩赦」で釈放⁽⁴⁾され、その1年後である1952年には「香港謀略団」(雑誌『話』10月号、出版社不明)において自身の蒋介石政権との和平工作にまつわる謀略活動の功績を発表している。



朝山は〔第二科〕六班に所属し久葉の助手をしていた 此の特殊班は
 第二班〔毒物合成等担当〕で研究した事の実施を担当す
 「過般戦犯関係で進駐軍から調査された時は此の班は除外し
 表面は出さなかつたのであるから今後共其点特に注意して欲しいとの事
 尚第三課〔科〕は紙幣の印刷等で対外関係があるので之又秘密にして貰い度い」

第1図 帝銀事件『捜査手記』別巻より山田桜供述箇所 1948(昭和23)年4月14日帝銀事件捜査員作成。右は山田桜が刑事に話した内容より画像囲み部分を書き起こした。〔 〕内は著者補足事項。(帝銀事件再審弁護団所蔵)

第1表 「登研会」が発足するまでの登戸研究所関係者の体験記などが掲載された主な雑誌・書籍

年代	内容	著者または取材対象者	旧所属
1951(昭和26)年1月~3月	「風船爆弾」(雑誌『自然』, 中央公論社)	高田貞治	風船爆弾開発協力者 (第八陸軍技術研究所, 少佐)
1951(昭和26)年12月	「風船爆弾の気象学的原理」(雑誌『地学雑誌』60-4, 中央公論社)	荒川秀俊	第一科囑託(中央气象台)
1952(昭和27)年10月	「香港謀略団」(雑誌『話』10月号, 出版社不明)	阪田誠盛	阪田機関長, 偽造法幣流通の実務責任者
1956(昭和31)年12月	「準備された秘密戦」(雑誌『週刊読売』臨時増刊号, 読売新聞社)	岩畔豪雄	軍事課長, 偽札工作(杉工作)の総責任者(少将)

1959（昭和34）年8月	「日本のスパイ廠第九技研：初めて明らかにする秘密新兵器の全貌」（雑誌『週刊現代』8月30日号，講談社）	取材対象者：草場季喜，八木秀次など	第一科科长（少将），風船爆弾開発の協力者（嘱託，气象台）
1961（昭和36）年11月	「風船爆弾 そのアイデアと威力のすべて」（雑誌『丸』11月号，潮書房）	草場季喜	第一科科长（少将）
1966（昭和41）年8月	「平和への戦い」（雑誌『文藝春秋』8月号，文藝春秋社）	岩畔豪雄	軍事課長，偽札工作（杉工作）の総責任者（少将）
1967（昭和42）年9月	「私は帝国陸軍で偽造紙幣を造った：日本最初の本格的な中国紙幣偽造秘話」（雑誌『現代』9月号，講談社）	高松繁	第三科中央班（当時の身分不明）
1975（昭和50）年1月	「日中戦争経済謀略」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	岡田芳政	松機関長，偽造法幣の流通責任者（大佐）
	「対支通貨謀略秘話」（機関誌『陸軍経理学校同窓会誌若松』新春号，若松会）	山本憲蔵	第三科科长（主計大佐）
1977（昭和52）年3月	「登戸研究所の秘密」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	篠田鎌 伴繁雄	登戸研究所所長（中将）第二科第一班班長（技術少佐）
1977（昭和52）年3月	「風船爆弾による米本土攻撃」（『陸戦兵器総覧』，日本兵器工業会）	草場季喜	第一科科长（少将）
1980（昭和55）年10月	「秘密兵器を作った登戸研究所」（雑誌『歴史と人物』10月号，中央公論社）	伴繁雄	第二科第一班班長（技術少佐）

(2) 「登研会」が発足するまで

登戸研究所には研究所があった現・川崎市多摩区および周辺に居住する10代の若者が雇員・工具として多く雇用されていた。第2図が示すように，終戦直後の1946年の正月には，地域の元若手勤務員を中心に集まる機会があったことがわかる。こういった地域のつながりが基となり，1962（昭和37）年に第四科OBが中心となって第一回「登研第四科会」が開催される。これは元軍人を中心に結成された他の軍関係のOB会とは性質を異にし，地域の元若手勤務員が中心となって結成されたという特徴がみられる。



第2図 1946（昭和21）年正月に集まった元第三科北方班員 1946（昭和23）年1月撮影。

第四科は第二科と業務上密接なつながりがあったため，1963年には第二科と第四科合同で名簿が作成された。この第二科・第四科

会がのちの「登研会」の母体となる。

第三科については、1950年頃に元第三科員が「自然発生的に」集まり名簿の作成も行って⁽⁵⁾ようだが、米国の秘密戦に関わっていた「GPSO（政府印刷補給所）」員の大多数は三科会に出席することはなかった。



第3図 第一回登研四科会
1962（昭和37）年7月撮影。

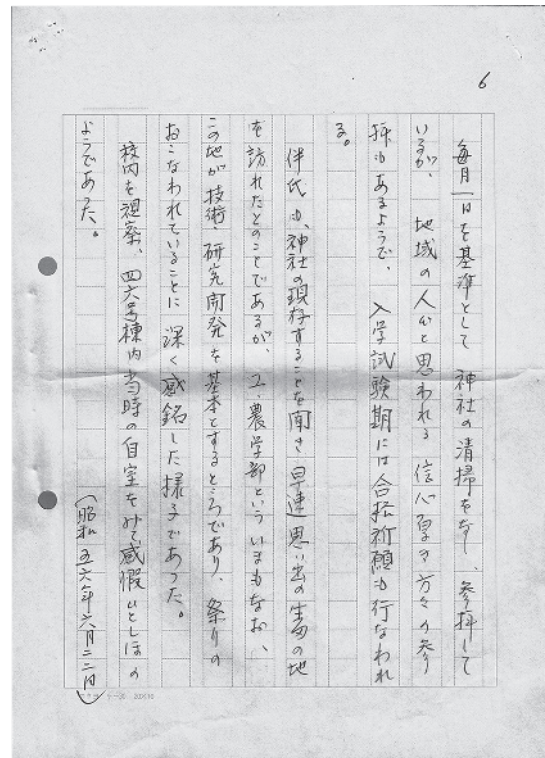
第2表 登研会が発足するまでのあゆみ

1946（昭和21）年	地域の元若手勤務員ら、正月に集まる
1950（昭和25）年頃	三科会が自然発生的に結成される
1961（昭和36）年	米国の秘密戦に携わっていた「GPSO」関係者、名簿作成
1962（昭和37）年	第一回登研四科会
1963（昭和38）年	第二科と第四科OBの名簿作成
1982（昭和57）年	登研会発足

(3) 第二科および第三科の活動が公けになる

生物化学兵器、毒物謀略兵器開発の中心だった第二科の活動については、帝銀事件に関連したためジャーナリストによって紹介されることはあったが、第1表からもわかるように、元所員自らが語ることは長らくなかった。しかし、一つの転機が訪れる。

1980（昭和55）年10月、伴繁雄（第二科第一班長、技術少佐）が実名を出して、雑誌『歴史と人物』10月号（中央公論社）に第二科の活動を発表する。この記事を通じて登戸研究所に関心をもったNHKが、登戸研究所の取材を始める。この取材過程でNHKスタッフは伴に生田キャンパス内に登戸研究所の遺構がまだ残っていることを知らせる⁽⁶⁾。これを受け、伴は1981年6月、登戸研究所跡地である明治大学生田キャンパスを戦後初めて訪れた。その際に当時の明治大学生田校舎事務部長が残したメモが「生田神社の由来」（第4図）である。メモには伴と篠田鎌が中心となっ



第4図 生田神社の由来 1981（昭和56）年6月、明治大学生田校舎事務部長作成。（明治大学所蔵）

て建立した「弥心神社（現・生田神社）」が今も残り活用されていること、さらに伴が使っていた研究棟（44号棟）の自室も残っており、今も農学部が研究棟として使用していることをみて「感慨ひとしほのようであった」と書かれている。

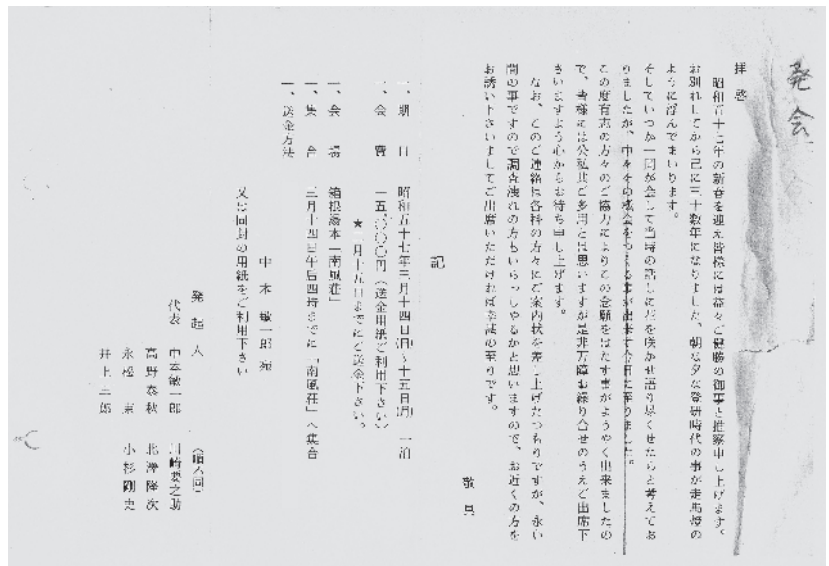


第5図 NHK「歴史への招待」取材で生田キャンパスを訪れた山本憲蔵 旧偽札印刷工場前で撮影された。1981（昭和56）年10月撮影。（狛江市所蔵）

また、同年10月には、これまで公けに一切偽造紙幣製造について語らなかった第三科長（大佐）の山本憲蔵が、責任者として初めてNHKの番組「歴史への招待」に出演し、その全貌を語る。番組では、山本は登戸に隣接する狛江市内に居住しながらも、戦後一度も登戸研究所跡地を訪れたことはなく、30年以上ぶりに足を踏み入れることについて「一回来たい来たいと思いつつ、もうチャンスはないと思っていた。感無量」と話す姿が印象深い。「極秘」とされていた第三科の活動を、責任者自らが公けに語る姿は、元所員らの心情に大きく影響したと考えられる。

(4) 「登研会」の発足と「登戸研究所跡碑」建立へ

戦後も登戸に居住していた第一科庶務班長（大尉）中本敏一郎、地元の元若手勤務員が呼びかけ人となり、1982（昭和57）年に初めて全ての科の元勤務員が集まる「登研会」が発足した。



第6図 第1回登研会案内状 1982（昭和57）年、登研会作成。（栗山武雄氏寄贈）

1982年3月に開催された第一回登研会では、交流を促進させるための名簿作成と「登戸研究所跡碑建立」が目指された。

1988年3月23日付「〔登研会〕会報」には、「登戸研究所跡地へ記念碑建立の件」として「登戸研究所跡地は、現在明治大学生田校舎が建ち並び、あの登戸研究所の面影がまさに消え去らんとしております。この敷地の一隅に、大学の許可を得て石碑を建立し、「陸軍登戸研究所」名を遺留したいことと存じます」とあるが、跡碑

建立には伴の生田キャンパス来訪が影響したと考えられる。

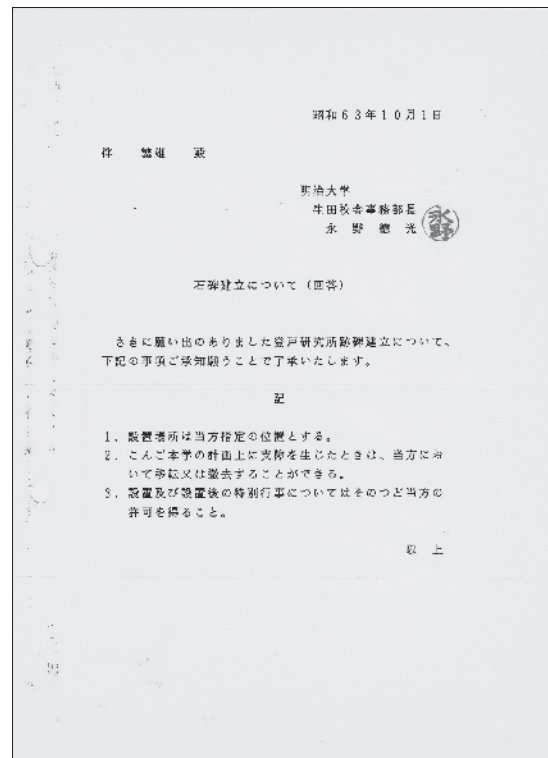
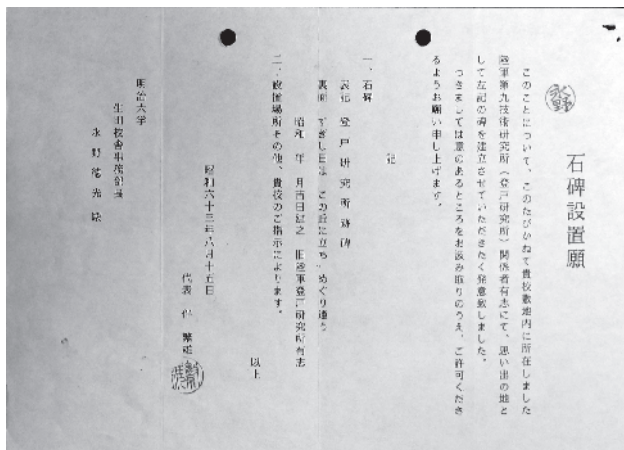
第一回登研会後に建立のための寄付が呼びかけられ、当時の身分や男女関係なく 85 名の元所員、勤務者より寄付金がよせられ、1988 年 11 月までに 54 万 5 百円が集まった。建立に際しての明治大学との交渉は伴が担い、弥心神社（現・生田神社）境内に跡碑を建立することが決定した。



第7図 登研会のようす 2003（平成15）年9月撮影。

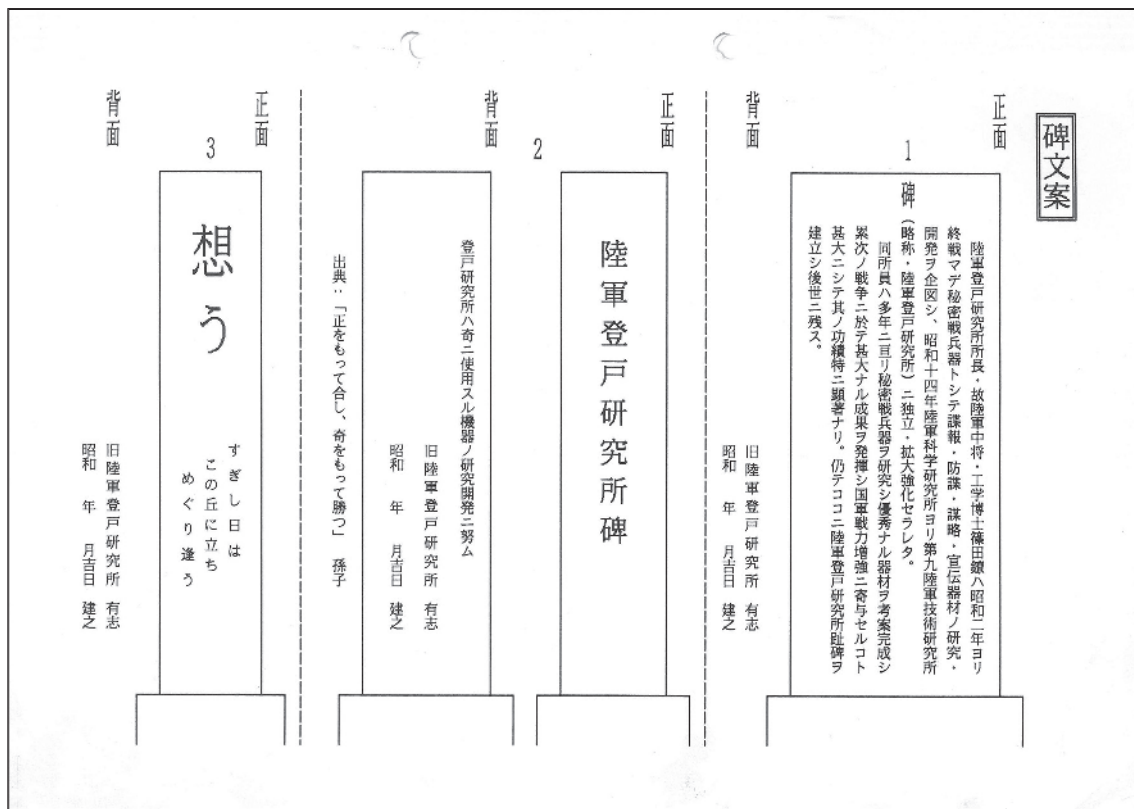
碑文については、登戸研究所の功績を遺す①案と②案、そして積年の思いを句にこめた③案が提案された（第9図）。碑文の選定は、将校クラス（幹部）の一存ではなく全員の意見が反映されるよう、投票制とされた⁽⁷⁾。1988年に行われた投票結果は第10図のとおりである。②案と③案が同票だったため、この2つを組み合わせた現在の碑文が決定した（第11図）。

当時の身分に関係なく碑文が選ばれたことは、登研会の特色と言える。このような民主的な運営は他の旧日本軍関係のOB会ではみられないのではないだろうか。跡碑に刻まれた「過ぎし日は この丘に立ち めぐり逢う」という句⁽⁸⁾には「秘密を抱え込んだ人生から解放される喜び」が込められているという⁽⁹⁾。

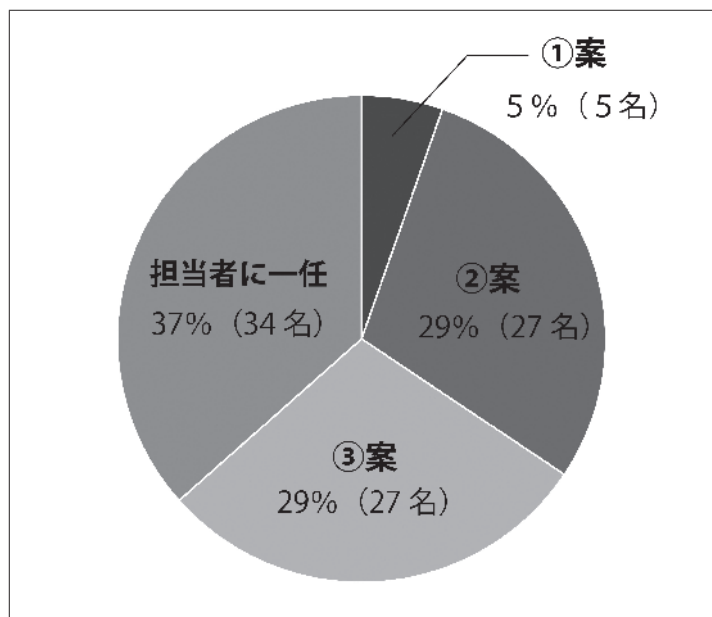


第8図 「石碑設置願」(左) 1988（昭和63）年8月15日，伴繁雄作成。（明治大学所蔵）

「石碑建立について（回答）」(右) 1988（昭和63）年10月1日，明治大学生田校舎事務部長作成。（渡辺賢二氏所蔵）

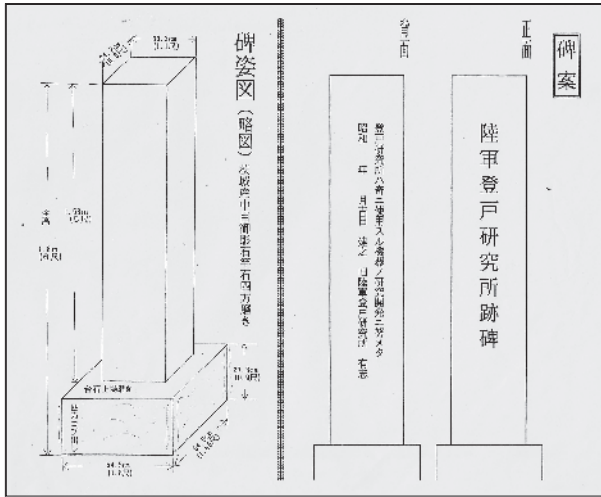


第9図 「碑文案」 1988（昭和63）年，登研会作成。（渡辺賢二氏所蔵）



第10図 碑文選考投票結果

100名にハガキが送付され、88名の回答があった（複数回答あり）。回答無の27名は一任に含めた。（渡辺賢二氏所蔵「登研会ファイル」より筆者作成）



第11図 「碑案」 1988（昭和63）年，登研会作成。（明治大学所蔵）



第12図 現在の跡碑 2020（令和2）年筆者撮影。

(5) 跡碑建立時期について

跡碑の裏面をみると「昭和六十三年十月建之」となっているが、実際に建てられたのは1989（平成元）年4月だった。当時の登研会会長だった北澤隆次（元第四科技師）が跡碑揮毫者に宛てた書簡によると、昭和天皇の危篤が1988年9月に報道されたことにより、明治大学内の学生運動が活発化し事態が落ち着くまで建立を見送ったようである⁽¹⁰⁾。天皇崩御後も学生運動を刺激することを避け、大学の春休み期間中である1989年4月4日に据え付けが完了した。また、同年の11月22日には除幕式が執り行われた（第13図）。



第13図 跡碑除幕式 除幕しているのは伴繁雄。1989（平成元）年11月撮影。

2. 「登戸研究所」掘り起こし運動

(1) 川崎市民による「登戸研究所」掘り起こし運動

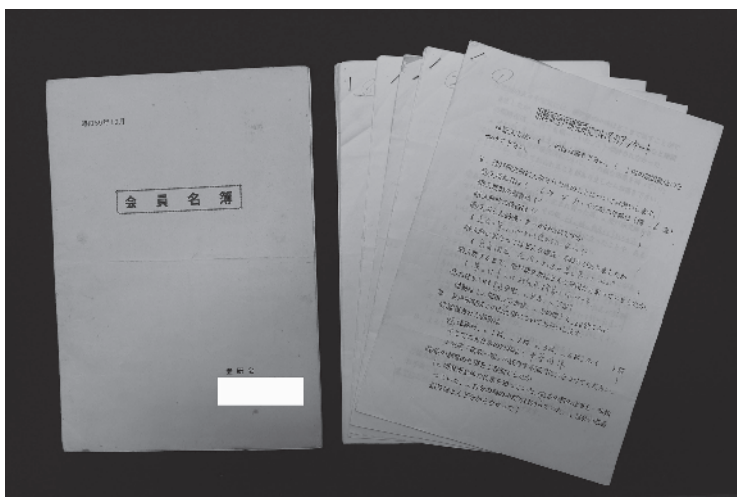
川崎市民による登戸研究所記録活動として最も早い例は、郷土史家の角田益信^{かくた}氏の写真記録である。角田氏は1982（昭和57）年より、生田キャンパス内外に残る登戸研究所遺構の写真記録を続けている。市民グループが登戸研究所跡地（現・生田キャンパス）を見学した最も早い例は、嶋村龍蔵氏が呼び掛けた1987年8月の川崎文化会議の見学会であろう。川崎文化会議のメンバーであり川崎市史編纂委員でもあった嶋村龍蔵氏は、市史編纂事業の過程で登戸研

究所を知り、伴繁雄や山本憲蔵も取材し『わが街川崎』第3号（川崎文化会議, 1987年）に「陸軍登戸研究所 秘密謀略戦の研究基地」を発表している。そして、後の高校生や元勤務員らの掘り起こし運動にも大きな影響を与えたのが1987年度より始まる「中原平和教育学級」の取り組みである。川崎市は全国の政令指定都市にさきがけ「核兵器廃絶平和都市宣言」を出し、1985年には、行政が主導し市民自身が企画委員となって講座を運営する取り組み「平和教育学級」がスタートする。平和教育学級では市民の「地域の戦争の記憶を知りたい」という思いから、川崎市内各地で歴史の掘り起こし運動が展開された。その中で、前項で紹介した1981年放映の「歴史への招待」を見た中原平和教育学級メンバーが、地域にこのような歴史があったことに衝撃を受け、1987年度の学習テーマに登戸研究所を選んだのである⁽¹¹⁾。

1988年2月には、中原平和教育学級主催で登戸研究所跡地見学会を開催した。多くの市民が集まる中、中原平和教育学級メンバー（以降、平和教育学級）は、元登戸研究所勤務員である井上三郎に出会う。井上から、「登研会」という登戸研究所OBが集まる会があることを告げられた平和教育学級は、彼らへの聞き取り調査を申し出たが、この時は断られた。しかし、井上自身はその後も平和教育学級の聞き取り調査に応じ、井上と交流のある元登戸研究所勤務員を紹介した。平和教育学級は元勤務員と交流を重ねる中で、井上より「登研会名簿」を託される。名簿を確認すると、多摩区や麻生区など川崎市内にまだ多くの元登戸研究所勤務員が居住していることが判明した。そのため、平和教育学級に所属していた高校生メンバーの一人から、名簿を基にした川崎



第14図 中原平和教育学級で元勤務員と調査する市民
1988（昭和53）年7月撮影。（個人蔵）



第15図 登研会名簿とアンケート

市内在住の元勤務員へのアンケートが提案され、川崎市教育委員会の協力の下アンケートが実施された（第15図）。その中で、当時の文書約900点が綴られた第一級資料『雑書綴』が提供されることとなった⁽¹²⁾。

(2) 長野と川崎の高校生による「登戸研究所」掘り起こし運動

平和教育学級のメンバーの一人であった渡辺賢二は、法政大学第二中学・高等学校（川崎市中原区）の教諭でもあった。1989（平成元）年、文化祭のテーマを生物化学兵器と決めた同校の高校生に、渡辺は登戸研究所のことを話した。「埋もれた過去の歴史を発掘するだけでなく、それを研究することで、現代につながるものが見えてくるのではないか」と考えた高校生は、平和教育学級の市民と共に登戸研究所の掘り起こしをしていくこととなる⁽¹³⁾。



第16図 文化祭で発表する長野県赤穂高等学校生徒
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

同じく1989年、登戸研究所の疎開先であった長野県駒ヶ根市でも、長野県赤穂高等学校「平和ゼミナール」が文化祭の発表テーマを登戸研究所に決める。きっかけは平和ゼミナールのメンバーだった春日いづみさんが「地元の戦争の傷跡を知ってもらいたい」との思いからだった⁽¹⁴⁾。

平和ゼミナールの高校生たちは、駒ヶ根周辺に住んでいる元所員らを尋ね歩き、当初は話そうとしなかった元所員と人間関係を築いていく中で、登戸研究所の活動を明らかにしていく。それまで大人には会おうとしなかった伴繁雄も、高校生たちが自らの手で登戸研究所の活動を明らかにしたことを「よく調べた」と評価し⁽¹⁵⁾、自らの経験を彼らに語るようになる。



第17図 高校生の聞き取りに応じる伴繁雄
1989（平成元）年平和ゼミナール撮影。

二つの地域で始まった高校生による掘り起こし運動は同年10月には交流が行われ、1991年には、両校の活動をまとめた『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会）が刊行された。

(3) 元登戸研究所勤務者自身による「登戸研究所」掘り起こし運動

当初は親睦と跡碑建立を目的として開催されていた「登研会」だが、市民や高校生と関わる中で、自分自身が勤めた登戸研究所とはいったいどのようなところだったのか、自分たち自身で掘り起こそうという動きが地元の元若手勤務員を中心に広がる。

その中の一人、前述の井上三郎は『読売新聞』に次のように語っている。

「ずっとあの〔風船爆弾に〕細菌搭載のうわさが気になっていた。真相が知りたかった。

細菌搭載の計画はあったのか、中止した理由はなんなのか。

上司たちは何も語らないまま次々と死んでいく。登研会を作ったのには、旧交を温めるとともに、事実を後世にしっかり伝えるため、今みんなから聞いておかねばとの思いがあった⁽¹⁶⁾」

1995（平成7）年8月26日付『読売新聞』より。〔 〕内は著者補足。

元若手勤務員は自分が行った作業が一体何に使われたのか、作った器材がどこへ送られたのか一切知らされず、ひたすら仕事に打ち込んでいた。「極秘」とされていた登戸研究所の業務について、戦前はもちろん戦後も誰かに問うことや話すことは憚られた。井上の証言からは長年抱えてきた登戸研究所への複雑な思いが感じ取れる。

元勤務員自身により登戸研究所の掘り起こしが行われる中、伴は『中野校友会誌』（陸軍中野学校卒業生らの機関誌）より抜粋し、登戸研究所の活動の概要をまとめた『陸軍登戸研究所の思い出』を登研会で配布する。これは、当時は何もわからなかった若手勤務員たちに登戸研究所の全容を伝えるきっかけとなった。また伴は、登戸研究所の全容を後世に伝えるため、1988年より手記を執筆する。自身がわからない活動については登研会メンバーに原稿を募り『陸軍登戸研究所の真実』の原稿が1993（平成5）年に完成する。このような流れの中で、元勤務員も自身の体験を語るようになっていく⁽¹⁷⁾。

3. 掘り起こし運動から保存運動へ

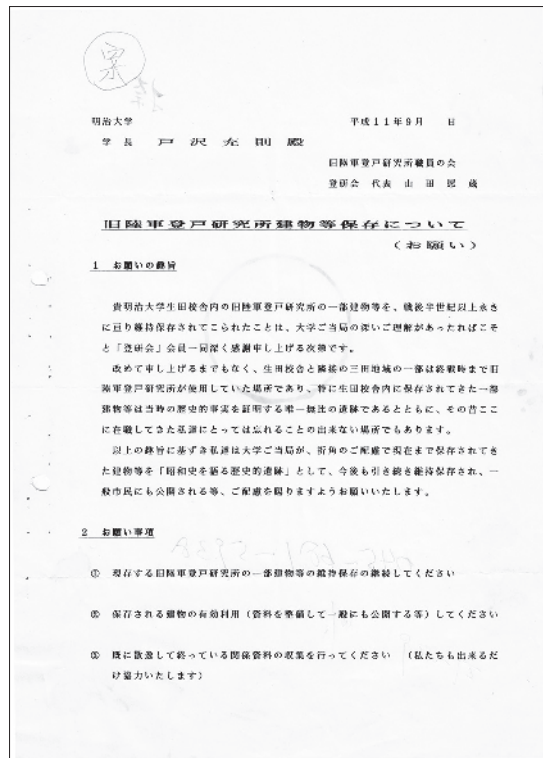
中原平和教育学級や高校生の掘り起こし運動によって、登戸研究所は多くのメディアでとりあげられ、市民の間にも関心が広がっていった。

1990（平成2）年、生田キャンパス内に残る旧登戸研究所本館の取り壊しが決定されたことから、登戸研究所遺構を保存しようという声が市民の中からあがり、同年に「旧陸軍登戸研究

所の建物を保存する市民の会」が発足、署名運動が展開され、12月14日に登戸研究所遺構の保存を求める署名3,339名が川崎市議会に提出された。この請願を受け、1991年、川崎市は旧登戸研究所本館の内外をビデオで撮影し、川崎市平和館に記録保存することを決定した。また、1991年6月には、川崎市平和館への移築保存を求める請願書も提出された。

また、文化財保護基準の改正（1995年）を受け、1998年より実施される文化庁の「近代遺跡調査」において保存運動の盛り上がりもあり、登戸研究所遺構が調査対象となった。さらに、2002年には国の文化財指定を念頭に入れた文化庁の全国戦争遺跡調査リストに登戸研究所が入り、文化庁による詳細調査も行われた。

また、登戸研究所の掘り起こしを自分たち自身ではじめた登研会でも、明治大学内に残る登戸研究所遺構の保存と活用を望む声があがるようになる。1999年9月に登研会は、当時の戸沢充則明治大学学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」を用意する（第18図）。この請願書では現存する登戸研究所遺構の維持保存、保存する建物は資料を整備し一般にも公開する等活用すること、既に散逸している関係資料の収集を訴えている。特に関係資料の収集については「私たちも出来るだけ協力いたします」とあり、これまで極秘とされてきた登戸研究所の活動について元勤務員自ら語り、資料も提供するという覚悟がみられる。しかしこの請願書は、学長が2000年に代わったため提出は見送られた。その理由の詳細は次章に記す。



第18図 戸沢学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」1999（平成11年）9月、登研会会長山田愿蔵作成。登研会が戸沢学長に提出する予定だったもの。（渡辺賢二所蔵）

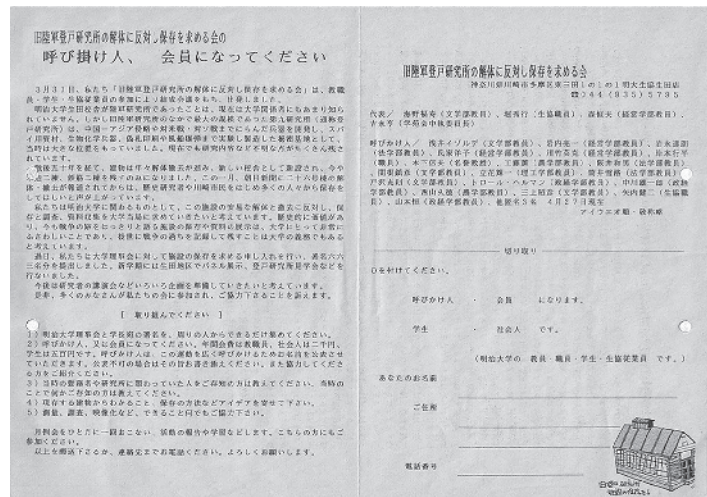
4. 明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

(1) 明治大学内での保存運動と学術的研究のはじまり

1994（平成6）年、明治大学は年度内の26号棟（第三科の倉庫）取り壊しを決定した。それを知った明治大学在学学生、教職員らが「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」（以降、「保存を求める会」）を同年3月に結成、学内での保存運動を展開することとなる。これま

で川崎市に対する移築保存を求める運動が市民によって続けられてきたが、「保存を求める会」の運動は明治大学に保存を訴える初めての保存運動だった。

校内での保存運動が展開される中で、学術研究として登戸研究所を検証する重要性を感じた海野福寿（当時明治大学文学部教授、保存を求める会共同代表）、森恒夫（当時経営学部教授、保存を求める会共同代表）ら明治大学教員と渡辺賢二は、明治大学人文科学研究所の総合研究として登戸研究所を取り上げることを決め、1994年に採択され、1995年度から3年度間、初めて組織的な学術調査が行われることとなった。また、この研究採択を受け、明治大学としてもすでに決定していた26号棟など旧登戸研究所遺構の取り壊しを調査研究のため3年間凍結することを表明した。この調査研究の成果は第3表に記す。



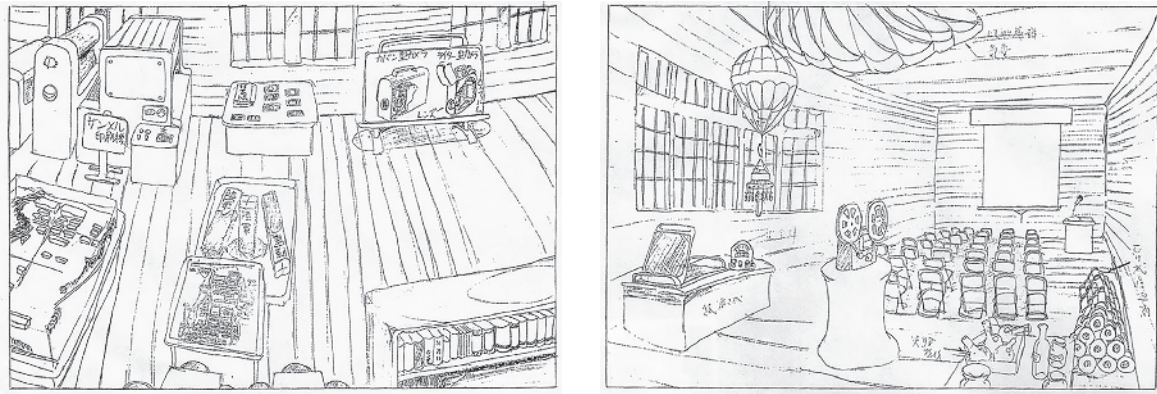
第19図 「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ 1994(平成6年)旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会作成。結成声明、呼びかけ人募集、講演会のチラシ。駿河台, 和泉, 生田各キャンパスで配布された。(明治大学所蔵)

第3表 人文科学研究所総合研究「旧陸軍登戸研究所の総合的研究—十五年戦争におけるその意義」の主な研究成果

写真家・吉田一法氏に依頼し、生田キャンパス、疎開先である長野県・福井県・兵庫県、人体実験を行った南京病院、阪田機関本部（上海）を取材およびスライド記録を作成。
元所員の証言を基に第三科疎開先である福井県武生および栗田部を調査。登戸研究所「北陸分廠」として接収した加藤製紙・西野製紙を調査し、疎開先での第三科の活動を明らかにした。
疎開先である兵庫県小川村を調査。「関西分廠」の活動を明らかにした。
元所員の証言を基に、終戦直後登戸研究所から寄贈された「登戸研究所」蔵書印がある書籍約1,000冊を静岡大学にて発見。
『雑書綴』復刻。(第三展示室に展示中)
研究成果をまとめた『陸軍登戸研究所』（青木書店、2003年）刊行。

(2) 登戸研究所跡地の保存・活用の兆しと凍結

人文科学研究所の研究成果により、登戸研究所が歴史的に重要であると学術的に示されたこともあり、当時の戸沢充則学長（文学部教授）は、登戸研究所跡地を大学として保存し活用すると表明する。これに基づき、1999（平成11）年4月には、学長の下に「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」が発足する。この中で5号棟（偽造法幣印刷工場）・36号棟（生物化学兵器研究棟、現・資料館建物）を展示資料館と平和教育の場として活用することが模索され（第20図）、明治大学創立120周年にあたる2001年に展示施設およびモニユメントを設立することが決定された。



第 20 図 「登戸研究所資料館」展示イメージ図

1999 年に発足した「登戸研究所跡地の保存及び活用に関する検討委員会」で出された 5 号棟および 36 号棟を活用した展示案。1999（平成 11）年 9 月，森恒夫作成。（明治大学所蔵）

しかし，学内では学生運動が激化し，明治大学は正常な大学運営ができない状態に陥っていた。これを問題視した大学は「明治大学完全正常化」に全力を挙げることを表明する。登戸研究所保存運動を行う一部が学生運動に関係していたことから，2000 年，新たに就任した山田雄一学長（経営学部教授）により，登戸研究所に関するすべての保存と活用方法が凍結されることとなった。



第 21 図 ミニ展示室の案内 2000（平成 12）年撮影。（明治大学所蔵）

登研会では上記検討委員会の発足をうけ，戸沢学長に提出すべく前述の保存と活用の請願書を用意していたが，大学の保存方針が変わったことから提出することは叶わなかった。

大学内で登戸研究所遺構の保存と活用が凍結されている間にも「保存を求める会」は，5 号棟の一部に「登戸研究所ミニ展示室」を独自に設置（第 21 図），元勤務員を講師に迎えた講演会を開催するなど保存・活用の運動を続けたが，大学として正式な取り組みが成されることはなかった。

(3) 明治大学平和教育登戸研究所資料館設立へ

2004（平成 16）年，新たに就任した納谷廣美学長（法学部教授）により明治大学における平和教育の柱として，登戸研究所遺構の保存と展示活用が打ち出され，4 年間凍結されていた保存と活用問題がようやく動き出すこととなる。2005 年春，大学は和田一夫（元登戸研究所

所員、登研会事務局長)、長年登戸研究所研究に第一線でかかわってきた渡辺賢二、元明治大学教員である海野福寿・森恒夫と登戸研究所遺構の保存と活用についての話し合いの場を設ける。その中で登研会を代表して和田より以下の訴えが出される。

「登研会より保存要求の嘆願書を預かっているが、登研会会長の山田愿蔵さんはもう90歳であるし、会員も歳をとり残り少なくなっているのです、早く処置をしないと貴重な資料が散逸してしまうと危惧している」

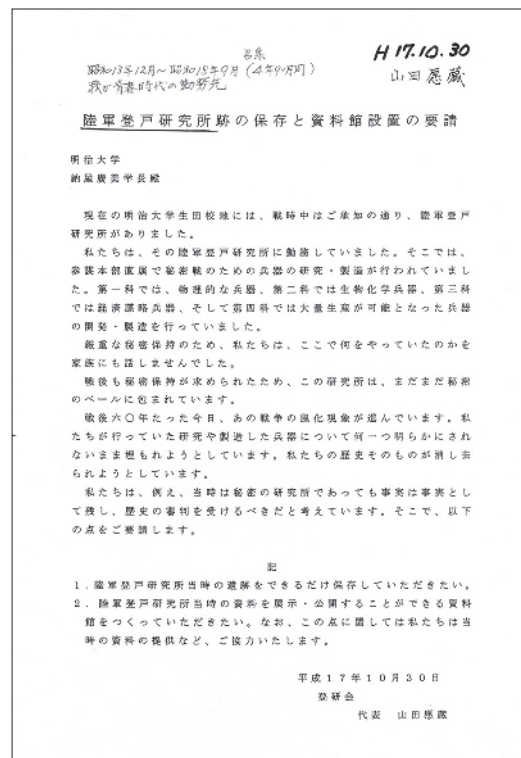
(明治大学所蔵「懇親会メモ」より)

この懇親会の内容は、同年10月に開催された登研会でも共有された。その中で、登戸研究所で行われた非人道的な研究や実験を繰り返してはいけない、後世の人たちには自分たちと同じ思いをして欲しくないという元勤務員たちの強い訴えが再度確認され、納谷学長宛に「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」(第22図)を提出した。

これを受けた大学は、2006年7月に「登戸研究所明治大学展示資料館(仮称)の設置に関する検討委員会要綱」を制定、同年9月に第一回検討委員会が開催され、具体的に登戸研究所遺構の保存と展示施設設立に動き出した。

また、中原平和教育学級から継続して、川崎市では何度も登戸研究所の学習が取り上げられ、市民の登戸研究所掘り起こし運動が市域に広がっていく。そうした中で、受講生らによって2006年に「旧陸軍登戸研究所の保存を求める川崎市民の会(現・登戸研究所保存の会)」が結成され、2007年1月には5号棟の移築保存と資料館設立に対し川崎市も明治大学を援助するよう署名活動を開始し、集まった9803筆とともに市議会へ請願書を提出する。この請願書を受け、26号棟解体(2008年)、5号棟解体(2011年)どちらの際にも調査を行い、部材の一部を保存し当館に展示している。

こうして多くの人々の思いを受け、2010年3月29日に明治大学平和教育登戸研究所資料館は開館した。



第22図 納谷学長宛「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」2005(平成17)年10月30日、登研会会長山田愿蔵作成。

おわりに

残念ながら登研会会長の山田愿蔵さんは当館開館前に逝去され、開館を見届けていただくことは叶わなかった。しかし、オープニングセレモニー当日には多くの登研会メンバーの皆様にご参加いただき、当館は無事に開館することができた。その後も、当館の開館を知った元勤務員の方が多く来館されている。自ら元勤務員だと語ってくださる方もいる一方、こちらからお声がけして元勤務員だとわかる方もいた。中には初めて登戸研究所のことを人に話すという方もいらっしやった。話そうと思ったきっかけは、これまで誰にも話してこなかった内容が、資料館に展示され公開されている、もう話しても良いのだという思いをもったからとのことだ。

また、30年前、登戸研究所の疎開先である長野県駒ヶ根市において掘り起こし運動を率いた高校生、北原いづみさんが2019年、若くしてご逝去された。北原さんが元所員と人間関係を結んだことによって、「大人の誰にも話したくないが、君たち高校生には話そう」と人体実験や毒物兵器の製造といった重い事実を元所員は語るようになった。近年では駒ヶ根市でも登戸研究所の掘り起こし運動が再開され、市民や高校生が「登戸研究所調査研究会」を2018年に発足し、北原さんも世話人として活躍されていた中でのことだった。心よりご冥福をお祈りいたします。

多くの市民、そして元登戸研究所勤務員の「二度と登戸研究所で行われたことを繰り返してはいけない」という強い思いを受け取り、当館では登戸研究所の調査研究を進めていくとともに、その成果を社会の平和教育・歴史教育・科学教育に活用していただけるよう、これからも邁進していく。

謝辞

本稿を執筆するにあたり、下記のみなさまにご協力いただきました。ここに記し、感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)

稲田郷土史会／狛江市／帝銀事件再審弁護団／登戸研究所調査研究会／

登戸研究所保存の会／毎日新聞社

〔注〕

(1) 帝銀事件とは1948(昭和23)年1月26日に発生した集団毒殺銀行強盗事件。使用された毒物が登戸研究所で研

- 究開発された特殊毒物ではないかと疑われ、元登戸研究所員の多くが事情聴取を受けた。『捜査手記』は、捜査の主任刑事・甲斐文助が残した捜査会議メモ。詳細は『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第5号（明治大学平和教育登戸研究所資料館，2019年）を参照されたい。
- (2) 海烈号事件とは1949（昭和24）年8月17日に横浜港にて発生した密輸事件。阪田誠盛、元阪田機関員の板垣清、5・15事件にも参加した三上卓ら計6名が共謀し、中国（台湾）国営の招商局所屬船「海烈号」にてペニシリンなど薬剤品約5億円分を中国（台湾）から密輸しようとしていた。
 - (3) 1950年6月9日付『毎日新聞』朝刊2面記事より。
 - (4) 1951年12月24日付『毎日新聞』朝刊3面記事より。
 - (5) 1972年12月10日付第三科会会員名簿送付状より（資料No.1936-002）。
 - (6) 「生田神社の由来」（明治大学生田庶務課長作成，1981年）1枚目。
 - (7) 昭和63年4月20日付「登研会会報」によると、本来であれば第4回登研会において碑文を決定する予定だったが、当日協議する時間が足りず、後日ハガキによる投票制となった。選考会には伴繁雄（技術少佐）、杉田正三美（下士官）、永松東一（下士官）、北澤隆次（技師）の他、雇員・工員の元若手勤務員4名（うち女性は2名）と当時の身分不明者1名が参加した。選考会への参加は登研会会員全員へ呼びかけられており、当時の身分に関係なく碑文が決定されたことがこの点によってもわかる。
 - (8) この句を詠んだのは登研会事務局の杉田正三美（下士官）だと登研会世話人の一人でもあった横山サト子（雇員）は語っている（2011年1月19日資料館聞き取りより）。
 - (9) 渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」（歴史科学協議会編集『歴史評論』2014年8月号、校倉書房）p.45。
 - (10) 『北澤隆次追悼集』より（資料No.270）。
 - (11) Love & Peace K30 川崎市教育委員会、川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習30年の歩み—1985年～2014年の記録—』（Love & Peace K30 川崎市教育委員会、川崎市高津市民館，2017年）。
 - (12) 『雑書綴』については2018年度企画展「少女が残した登戸研究所の記録—陸軍登戸出張所開設80年—」および『明治大学平和教育登戸研究所資料館 館報』第6号（明治大学平和教育登戸研究所資料館，2020年）を参照されたい。
 - (13) 長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991年）p.143。
 - (14) 同上 p.13。
 - (15) 1989年8月赤穂高校平和ゼミナール撮影伴繁雄インタビュー映像より（木下健蔵氏提供）。
 - (16) 井上三郎は第四科に所属し、風船爆弾打ち上げを担当していた。
 - (17) 和田一夫（第一科工具）は1994年に自伝『昭和とともに生きて（わが人生の足跡）』を刊行、川崎要之助（第四科憲兵器材担当）は1997年～2001年にかけて多摩区で活動する稲田郷土史会機関誌『あゆたか』第35～39号に登戸研究所についての記録を発表した。

〔参考文献〕（著者名五十音順）

- 稲田郷土史会『あゆたか』第35号～第39号（稲田郷土史会，1997～2001年）
- 海野福寿、山田朗、渡辺賢二『陸軍登戸研究所 隠蔽された謀略秘密兵器開発』（青木書店，2003年）
- 川崎市中原平和教育学級編『私の街から戦争が見えた 謀略秘密基地登戸研究所の謎を追う』（教育史料出版会，1989年）
- 斎藤充功『謀略戦 —ドキュメント陸軍登戸研究所』（時事通信社，1987年）
- 鈴木正敏「キャンパスの正常化」
- （明治大学経営学部人文科学研究室『人文科学論集』第58号，明治大学経営学部人文科学研究室，2012年）
- 長野・赤穂高校平和ゼミナール、神奈川・法政二高平和研究会『高校生が追う陸軍登戸研究所』（教育史料出版会，1991年）
- 登戸研究所調査研究会『北原いづみさん追悼集 いづみさんの思いを受け継いで』（登戸研究所調査研究会，2019年）
- 濱田武士「戦争遺産の保存と平和空間の生産」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号，校倉書房）
- 村上有慶「戦跡保存の取り組みと課題」（歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号，校倉書房）
- 山田雄一「明治大学キャンパス秩序回復をめぐる」

(機動隊員等を励ます会『はげまし』第364号, 機動隊員等を励ます会, 2005年)

Love & Peace K30 川崎市教育委員会, 川崎市高津市民館『川崎市平和・人権学習30年の歩み—1985年～2014年の記録—』(Love & Peace K30 川崎市教育委員会, 川崎市高津市民館, 2017年)

渡辺賢二『陸軍登戸研究所と謀略戦—科学者たちの戦争』(吉川弘文館, 2012年)

渡辺賢二「陸軍登戸研究所の実相をみつめて」(歴史科学協議会編『歴史評論』2014年8月号, 校倉書房)

第11回企画展「極秘機関『陸軍登戸研究所』はこうして明らかになった—登戸研究所掘り起こし運動30年のあゆみ—」展示資料一覧

本稿図表番号	資料名	所蔵者	資料番号
掲載無	『週刊現代』1959年8月30日号(複製)	登戸研究所資料館	C-122
掲載無	帝銀事件『甲斐捜査手記』別巻より(複製)	帝銀事件再審弁護団	—
掲載無	『歴史と人物』1980年10月号(中央公論社)	登戸研究所資料館	1983
掲載無	『歴史への招待』(NHK)	渡辺賢二氏	—
第4図	「生田神社由来の一つ」(複製)	明治大学	—
第6図	第一回登研会案内状	登戸研究所資料館	971
掲載無	第一回登研会の報告および登研会名簿呼びかけハガキ	登戸研究所資料館	970
第8図	石碑設置願	明治大学	—
第8図	石碑建立について(回答)	渡辺賢二氏	—
第9図	碑文案	渡辺賢二氏	—
第11図	碑案	渡辺賢二氏	—
掲載無	「登研会会報」(登研会, 1988年4月20日)	渡辺賢二氏	—
掲載無	碑文アンケートハガキ(登研会, 1988年)	渡辺賢二氏	—
掲載無	跡碑に関する書簡(『故北澤隆次追憶集』より)	登戸研究所資料館	270
掲載無	「登研会会報」(登研会, 1989年5月25日)	渡辺賢二氏	—
掲載無	「登戸研究所跡碑」拓本(2013年稲田善樹氏作成)	登戸研究所資料館	—
第12図	現在の「登戸研究所跡碑」写真(2010年撮影)	登戸研究所資料館	—
掲載無	1987年度・1988年度中原平和教育学級募集チラシ	登戸研究所資料館	1950
第15図	登研会会員名簿	登戸研究所資料館	1948
第15図	元陸軍登戸研究所についてのアンケート(回答)	登戸研究所資料館	71
掲載無	1981年12月22日付『毎日新聞』切り抜き	登戸研究所資料館	1768
掲載無	『あゆたか』第35号(稲田郷土史会, 1997年)	登戸研究所資料館	—
掲載無	松川仁『キノコ随想』	登戸研究所資料館	154
掲載無	伴繁雄『陸軍登戸研究所の真実』原稿	登戸研究所資料館	152
掲載無	和田一夫『昭和と共に生きて(わが人生の足跡)』	登戸研究所資料館	597
掲載無	川崎市教育委員会「近代遺跡(軍事に関する遺跡)詳細調査の実施について(依頼)」(1998年)	明治大学	—
掲載無	文化庁「近代遺跡詳細調査(陸軍第九技術研究所 明治大学生田校舎所在)にかかる協力依頼の送付について」(2003年)	明治大学	—
第18図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について(お願い)」(登研会, 1999年)	渡辺賢二氏	—
第19図	「旧陸軍登戸研究所の解体に反対し保存を求める会」チラシ(1994年)	明治大学	—
掲載無	登戸研究所遺構保存要望書および署名(1999年)	明治大学	—

第20図	「登戸研究所資料館」展示候補資料リストと展示イメージ図（1999年）	明治大学	—
掲載無	『明治大学新聞』（明治大学新聞学会、2000年）	明治大学	—
第22図	「旧陸軍登戸研究所建物等保存について（お願い）」（登研会、2005年）	登戸研究所資料館	587
掲載無	大島康弘「旧陸軍登戸研究所資料館完成にあたって」（2010年）	明治大学	—